



CFI ニュースレター C2023-12 「ひとつのしるし」

[今月の聖書]

「それ故、主は、自らひとつのしるしをあなた方に与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名は、インマヌエルとなえられる。」(イザヤ 7: 14)

「インマヌエルよ、その広げた翼はあまねく、あなたの国に満ちわたる」(イザヤ 8: 8)

「ひとりのみどりごが我々のために生まれた。ひとりの男の子が我々に与えられた。まつり事はその方にあり、その名は靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君となえられる。万軍の主の熱心が、これをなされるのである。」

(イザヤ 9: 6,7)

主の使いが夢に現れていった、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるが良い。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼はおのれの民を、そのもろもろの罪から救う者となるからである」。すべてこれらのことが起こったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、「見よ、おとめがみごもって、男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。」これは「神我らとと共にいます」という意味である。(マタイ 1: 20-23)



メリークリスマス! 2023年クリスマスのお喜びを申し上げます。今日、現在の世界の情勢は、「おめでとうございませう」と言えるような状況では無いかもしれません。しかし聖書の歴史を見ると、今日のテーマである「ひとつのしるし」という希望が示された時代(BC 700年頃)も、それから約700年後にキリストが誕生した時代も(約2000年前)、今以上に混沌とした時代であったのです。そこには超大国による圧力がありました。植民地支配など人権が尊重されない時代でした。また暴虐な君主によって、幼な子たちが虐殺された時代でもありました。国の為政者たちは刹那的な政治を行って、自信を失っていました。宗教家たちは神の栄光と清さを求めるような信仰の力を失って世俗化していました。民衆は、今生きるための生活に追われ、人間の尊厳であるビジョンも愛も信仰も失っていました。神との交わりを失った時代は、いつも人々にとっては「闇の時代」でした。救い主キリストの到来は、大いなる光であり、大いなる希望です。「暗闇の中に歩んでいた民は、大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。」(イザヤ 9: 2) 現実社会の暗闇に対して、神の御手が介入してくださるからです。

旧約聖書は1つの民族について語り、新約聖書は1人の人について語っているとされます。それはイスラエル民族の中から生まれ、全世界の全ての人を救うためにこられたイエス・キリストを指しています。ベツレヘムの飼い葉桶の中に生まれ、ゴルゴタの丘の上で十字架にかけられ、復活して天に帰り、近い将来、再び再臨されるお方、イエス・キリストのうちに唯一の希望があります。それは言葉を変えて言えば、救いを求める人類の叫びに、神が答えを用意してくださることなのです。クリスマスとは、願いの答えが既に準備されているというメッセージです。ですから、全世界の人々とともに叫びます「メリークリスマス!」と。この唯一の希望の光があなたのためにも準備されていることを確信して、祝福をお祈り致します。小田彰

(お知らせ)

*9月18日(月)大阪クリスチャンセンターにおける「喜びの歌を共に大阪集会」の特別編集版、CD 2000円、DVD 4000円。編集に大変時間がかかり、ただいま発行準備をしておりますので、今しばらくお待ち下さい。

*ライトハウスにおける2024年 元日礼拝はありません。新年礼拝は1月7日からとなります。

ナザレの一家族——ヨセフとマリヤとイエス

ベツレヘム滞在

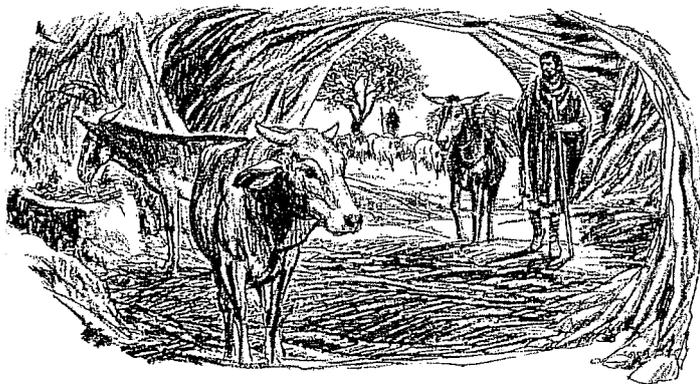
ナザレのイエスの誕生は、ローマ暦で747年、つまり紀元前6年と思われる。ルカによれば、両親のヨセフとマリヤはローマの人口調査のために、ナザレからヨセフの祖先の地ベツレヘムへ旅行することになった。

「そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。若い2人がベツレヘムへ向けて旅をしているとき、彼らのように、人口調査のため、帝国のすみずみから祖先の地に帰っていく、何百というユダヤ人に出会ったであろう。

ベツレヘムはエルサレムの南7キロのところにある村で、表面的には、石だらけの丘陵の地ユダヤに散在する他の村落と何ら変わるところがなかった。村に近づくにつれ、低いが、かなり急な丘の頂上に箱のような漆喰の白い家の集落が見えた。おそらく住民も300人ぐらいのものであったろう。

小さくても、ベツレヘムはにぎやかな町であった。エジプトへ向かう隊商がしばしば宿をとったし、1000年近く前のダビデ王のころに隊商宿が建てられて以来、何世紀にもわたって修繕や改築を加えながらも、隊商の宿泊所となっていた。村にはルツの墓があり、丘を下った谷間には、ボアズの畑が広がっていた。忘れてならないことは、ベツレヘムがイスラエル人の敬愛的であるダビデ王誕生の地であることであった。

旅に出て5日目の午後、ヨセフとマリヤはベツレヘムの近くに着いた。ナザレから144キロ、食料をろばの背にのせての徒歩の旅であった。大工のヨセフはがっしりとした体格の持主で、まさに働き盛りの年齢だった。妻のマリヤはおそらくまだ十代の若さと思われ、いくらか不安げであった。彼女はいまにも産気づきそうな身重だったからである。



ベツレヘムの洞窟は、青々と繁った草原に近く、家畜小屋として最適だった。上の絵にあるように、家畜番は洞窟の壁に窪みを作って飼料おけ代わりにして使った。この家畜番の服装はイエス時代の典型的なもので、底の厚いサンダルをはき、羊毛のチュニックと袖なしの外衣を着ている。

普段なら、人家に頼んで1部屋を借りることもできたであろうが、ヨセフが2、3軒尋ねてみたところでは、どの部屋もふさがっていた。それでも親切な村人が、ベツレヘムの近くの丘にある洞穴で夜を明かしたらどうかと勧めてくれた。その洞穴は村の家畜の番人が、家畜小屋として使っているところであった。

マリヤの状態が急を要していたために、ある農夫がその家畜小屋を貸してくれることになり、寝床用のわらとオリーブ油のランプを渡してくれた。マリヤが楽になれるようにヨセフはわらで寝床をつくり、毛布の代わりに自分の羊毛の外套をかけてやった。洞穴の奥のほうに、壁をくり抜いて作った飼料おけが見つかったので、ヨセフはそれにわらをいっぱい詰めて、生まれてくる子供の寝台にした。

イエスの誕生

その夜か翌朝早くに、マリヤが陣痛を訴え始めた。ヨセフはベツレヘム中を駆け回り、女中か助産婦を捜し出し、分娩に立ち会わせたことであろう。こうして男子が生まれ、産声を上げると、助産婦が手早くへその緒を切った。そして近くの井戸から水をくんできて、赤ん坊を沐浴させた。助産婦は病気に感染しないように、赤ん坊の身体に塩を塗りつけるのを忘れなかったであろう。

そのあとマリヤは、赤ん坊の手足が動かないように細長い亜麻布で巻き、布でそっと全身を包みこんだ。この習慣は、半年間は赤ん坊の手足を自由に動かせないようにしておかないと、生まれた子供の手足が丈夫に育たないという考えによるものであった。

マリヤは赤ん坊に乳を含ませると、飼料おけのなかにそっと寝かせた。夫婦はその子に、ヘブル語のごく普通の名前である Jeshua (「主は救いである」の意) という名をつけた。そのギリシア語形が Jesus である。誕生の8日目に、ヨセフはユダヤの律法に従って息子に金属の小刀で割礼をした。

イエスが生まれた翌日に、国勢調査の役人のところで登録するためにヨセフは村へ行き、マリヤはあとに残っていた。息子を生んだ母親は不浄とされ、ユダヤの律法では40日間は人々と接することが禁じられていたのである(もし女の子を生むと、さらに40日の隔離が必要となる)。

祭司がマリヤのためにふさわしい言葉を述べ、この儀式によってマリヤは正式に清められ、他の人々と会うことが再び可能となった。

聖書の偉大な人びと

その生涯と日常生活

G.アーネスト・ライト 監修
左近 淑彦 訳

GREAT PEOPLE
OF THE BIBLE
AND
HOW THEY LIVED

A Reader's Digest Book